

中学校社会科地理分野における KP 法を活用した授業実践

—わかりやすく伝える力の育成を目指して—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 江馬海輝

1. 研究の背景と目的

1-1. 研究の背景

中学校学習指導要領（平成29年告示）社会編より、社会科の目標（1）は「我が国の国土と歴史、現代の政治、経済、国際関係等に関して理解するとともに、調査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身につけるようにする」とされている。

しかし、教職大学院での授業観察や非常勤講師としての高等学校での指導経験より、まとめることが苦手な生徒が多くいる印象がある。実際に調べまとめる際には、教科書やインターネット等に記載されている内容をそっくり書き写す姿が多く見られる。加えて調べたことを自分なりの表現などでまとめる場面や情報を見比べる等の姿が少ないため、社会科の目標（1）の「諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる」ことが達成されている場面が少ないと考える。発表もそのまますることが多い。発表を聞いている側は学習内容が同じであることや同じ教科書や Web サイトを見ているから理解することができている。今後、個別最適な学びの推進により、学習の個性化が図られていくため、生徒それぞれの興味・関心がある内容への学習が進む。そして、それらをまとめ発表する機会も増える。そのため、様々な情報を簡潔にまとめ、他者にわかりやすく伝えることが必要になる。

1-2. 目的

KP 法を活用した授業実践が、生徒の資質・能力の育成に有効的であるか、検証する。なお、具体的な資質・能力は、「わかりやすく伝える力」と「聞き手の態度」である。「聞き手の態度」については、発表内容を自分の考えと比較しながら、学習内容について深めることができているかである。

2. KP 法

KP 法とは、紙芝居プレゼンテーション法のこと、キーワードや短いセンテンス、イラストなどを書いた紙（KP シート）を黒板などに順に貼りながらプレゼンテーションを行う手法である。川嶋（2013）によると、デジタル機器は基本的に使用しない。文字量が制限されていることで、聞き手にとってシンプルで見やすく、黒板に残るため、必要に応じて見返すことできる等の利点がある。

川嶋（2016）によると KP 法には4つの機能がある。①個人のプレゼンテーションの道具、②（プレゼンテーションの作成プロセスにおいて）個人の思考整理の道具、③グループのプレゼンテーションの道具、④（プレゼンテーションの作成プロセスにおいて）グループの思考整理の道具（合意形成の道具）。発表としてのツールだけでなく、作成段階においても4つの機能のような効果があるのが KP 法の利点である。

2-1. KP 法の新たな試み

KP 法は本来、デジタル機器は使用しないとされている。田畑（2021）では、新型コロナウイルスに対応するため、大学の遠隔授業で PowerPoint を利用したデジタル KP 法を実践している。そして、PowerPoint の操作に関する課題よりも課題のテーマや KP 法による課題の作成に難しさを感じており、個別の支援が遠隔授業では課題であると述べられている。KP 法のデジタル化の実践報告は、田畑（2021）以外に管見の限り見当たらない。そのため、KP 法はデジタル化しないと認識をされているが、本実践では、作成段階においてのみプレゼンテーションソフトを使用する。図1に例を示す。

理由としては、KP 法は作成段階に KP シートを並べて、全体像を確認するため、スペースの確

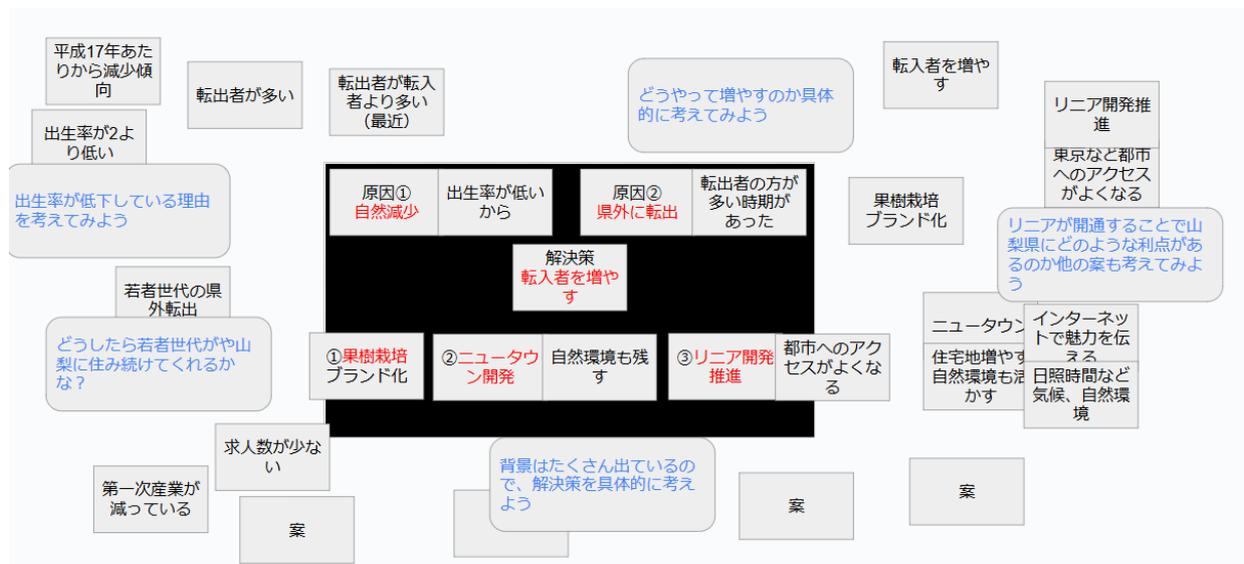


図1 生徒が作成したスライド

保が必要となる。デジタル機器を使用することが、スペースの確保が容易になることに加え、全体像が確認しやすいことと、全体共有をし、教師が空き時間にテキストボックス等でコメントを挿入することで、授業内で補うことができない個別の支援ができると考えたからである。

本研究における発表を従来の紙媒体で行う理由は、モニターの大きさ、設置場所によっては見にくい場所があるため。さらに、各端末に共有をしながら、発表することも可能だが、画面に集中をしてしまう可能性があるためである。

3. 研究方法

KP法を用いた授業実践を行い、グループワークの様子や振り返りシート等の記述から変容を見取る。また、事前アンケートと事後アンケートの結果を比較し、わかりやすく伝えることと、聞くことに対する意識の変容を調査する。アンケートは事前事後ともにGoogleフォームにて行った。

アンケート項目については、事前アンケートにおいて、以下の2点を質問項目として設定した。

①「授業中は他の人(生徒)の発表を聞く際にどのような態度であったのか、またはどのようなことを意識したり感じたりしていたのか

について教えてください。(社会科以外も含む。)(他の生徒の発表を聞くときに気をつけていること。感じたこと、学んだことなどを詳しくご記入ください。)

②「授業中に他の人(生徒)の発表を聞く際に、どのような態度であったのか、またはどのようなことを意識したり感じたりしていたのかについて教えてください。(社会科以外も含む。)(他の生徒の発表を聞くときに気をつけていること。感じたこと、学んだことなどを詳しくご記入ください。)

事後アンケートにおいて、以下の2点を質問項目に設定した。

①「今回の授業を通して、どのようなことを意識しながら発表することが大切だと考えたか、教えてください。(社会科以外も含む)(具体的にどのような点に注意を払うか、どのような工夫をするかなどを詳しくご記入ください。)

②今回の授業を通して、授業中に他の人(生徒)の発表を聞く際に、どのような態度であったか、またはどのようなことを意識したり感じたりしていたのかについて教えてください。

(他の生徒の発表を聞くときに気をつけていること、感じたこと、学んだことなどを詳しくご記入ください。)

4. 授業実践

4-1. 概要

対象校 山梨県内の公立中学校

対象者 第2学年 2クラス 計74名

時期 2024年11月

科目 社会科地理分野

単元名 山梨のこれから

時間数 各4時間

単元の目標

- (1) 地域の課題解決に向けて、考察したことを適切に説明、議論しまとめる手法について理解する。[知識及び技能]
- (2) 地域の在り方を、地域の結び付きや地域の変容、持続可能性などに着目し、そこで見られる地域の課題について、多面的・多角的に考察し、表現する。[思考力・判断力・表現力等]
- (3) 地域の在り方について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追及、解決しようとする態度を養う。[学びに向かう力・人間性等]

単元を貫く問い

より豊かな山梨をつくるために人口減少をどのように食い止めたらよいだろうか。

4-2. わかりやすく伝える力の育成の手立て

文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集 [中学校版]」の第2章言語の役割を踏まえた言語活動の充実について、以下のことが書かれている。

「各教科の指導において論理や思考といった知的活動を行う際、次のような言語活動を充実する。

- 事実等を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝えること
- 事実等を解釈するとともに、考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させること」

以上の内容を指導していく際の留意点が挙げられていることを踏まえ、本実践では、留意する内容を次のようにまとめ、わかりやすく伝える力の育成を目指すこととした。

①事実を正確に理解していくためには、視点を持たせる

②既習事項などと結び付けながら生徒なりに解釈し、理解しにくい表現を置き換えながらまとめさせる

③発表やグループワークを通して、多様な意見に触れながら、意見を深める

①では、グラフや表などの資料を多く提示する。様々な側面からの情報を読み解き、必要な情報を生徒が選択する。さらに、必要に応じて調べる。これらを通して他者にわかりやすく伝えるため、生徒自身、事実を正確に理解する。

②では、KP法を活用する。KP法の作成段階では、KPシートに書いた表現を比較する。これらの活動を通して、わかりやすく伝わりやすい表現を考えていく。

③では、全体の振り返りをするのではなく、グループの発表ごとに振り返りを行う。KP法は、一枚当たりの文字数が少ないため、発表を聞いている際に余裕が生まれる。この余裕を使って生徒には、発表内容について吟味させる。考えた内容を、それぞれのグループで話し合うことを通して、様々な意見に触れ、個人の考えを広げる・深めることをする。

4-3. 各時間の詳細

本実践では、山梨県の人口減少について着目した。なぜ人口減少が起こっているのか、要因を生徒が資料から読み取った。その後、読み取ったことや山梨県の強み・現状を踏まえた解決策を考えた。考えたことについてKP法を用いて、他者にわかりやすく伝えることを単元のねらいとした。

第1時間目

目標:資料を基に、山梨県でみられる人口減少の背景について理解することができる。

KP法を使用しながら授業を進行した。生徒は初めてKP法を使用するため、どのように紙に書かれているか、発表の仕方を観察するよう指示をした。

始めに、山梨県の人口の推移を確認した。その後、人口が減少することで自分たちの生活に影響

響があることについて既習事項を確認した。人口減少の原因は何か、そして今以上の住みやすい山梨県をつくるために、山梨県の良さを活かした解決策を考えた。

生活班（4～6人）に分かれて、資料から人口減少の要因の読み取りを行った。読み取った要因と山梨県のよさを活かしながら端末上でKP法を活用して解決策を考え、発表の準備を行った。

配布した資料は以下の通りである。

山梨県『統計からみたやまなし令和5年度一』より 「山梨県人口及び人口増加率の推移」 「人口動態の推移」 「人口動態（1年間）」 「産業別就業者数の推移」 「有効人口倍率・求職者数・求人数の推移」 「山梨ってどんな県？」 厚生労働省『人口動態調査』より著者が作成 「他県と比較した合計特殊出生率の変化」 統計局『住民基本台帳人口移動報告』より著者が作成 「2023年県外への移住者の年齢別割合」 「2023年県外からの移住者の年齢別割合」

KP法の説明やGoogleスライドの操作方法や作成の手順に関するものをプリントで配布を行い、初めてKP法を使用する生徒の躓きを減らした。

Google Classroomに生活班ごとのGoogleスライドを作成し、全員が編集をできるようにした。だが、本実践では、端末の使用は生活班で2台までと制限し、編集や調べることも意見を出し合うことを促した。さらに発表者以外がグループワークに参加しない可能性があるため、発表者は事前に決めず、発表直前に授業者が指名することを伝えた。

第2時間目

目標：山梨県でみられる人口減少に対しての解決策をわかりやすくまとめることができる。

2時間目が始まるまでに全ての生活班の

Googleスライドにコメントを加え、机間指導では不十分だったことを図1の青字のように補足した。主なコメント内容として、他の県との比較を促す、抽象的な意見が多かったため、具体的な意見や数字を示させたことである。

前半部分は前時に続き、解決策を考察し、発表に向けて準備を行った。

後半部分から3時間目にかけて発表を行った。発表時間は1グループあたり3分である。聞き手は、発表内容はKPシートが黒板に残るため、書き写すことはさせず、自分の考えとの比較や提案された解決策が実現可能かを考えさせることを意識させた。考えた内容はワークシートにメモをさせた（図2）。発表後に1分程度時間をとり、各自、内容を整理し、その後3分間生活班で振り返りを行った。生活班での振り返りを通して、多様な考え方に触れさせ、個人の視野を広げさせることを通して、考えの再形成を図った。

グループ番号	発表時のメモ (自分の考え)	グループでの話し合い時のメモ (自分の考えや他の人の考え)
三 班	<ul style="list-style-type: none"> 経済を発展させるならロボットの製造をなくしてもいいと思う。 ロボットをつくるための人はどうやって集める? 	ロボットの出荷量を増やそうよさを利用して人を集めるのはいいと思った。
五 班	<ul style="list-style-type: none"> 補助金をどうやって出すのか。 イベントを実施するのはそんなに難しいことではないのでもいいと思った。 	・若者に（じゅほう）のあるスポットを作るのはいいと思った。 ・補助金制度があることで山梨に人が集まるのでもいいと思った。

写真あり

図2 生徒のワークシートの一部

第3時間目

目標：山梨県でみられる人口減少に対しての解決策をわかりやすく説明することができる。

2時間目の後半と同様に発表と発表後に生活班での振り返りを行った。（図3）

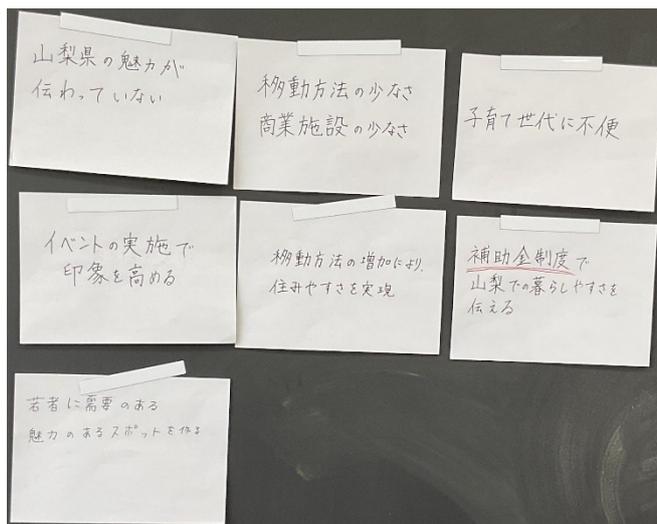


図3 発表後の黒板の様子

第4時間目

目標：よりよい山梨をつくるための取り組みについて、「持続可能性」に着目しながら主体的に選択することができる。

導入部分で全ての生活班の発表を振り返り、授業者が補足をした。どのような人口減少の要因に着目をした解決策なのか、いくつかの解決策が関係し合っていることについて振り返りをした。全ての生活班の提案の中からより豊かな山梨をつくるために効果的なものを生活班ごとに選択した。選択する際の視点を、「持続可能性」とした。「世代内の調和」「世代間の調和」「自然との調和」のバランスがよい提案を決定した。

5. アンケートの分析と結果

授業前に行った事前アンケートと授業後に行った事後アンケートを分析し、発表をする際に意識することや発表を聞く際に意識したことが今回の授業でどのように変化したかを見取る。

5-1. 事前アンケートの結果

まず、「これまでの発表について意識したこと」について問いを行い、自由記述で回答をもらった。回答結果を、大きな声で発表する等の態度面とわかりやすく発表をする等の内容面、態度面と内容面の両方が書かれていたもの、態度

面と内容面に分けることができないその他に分類をした。結果は以下の表1の通りである。

表1 事前アンケートの結果（発表）

	人数 総数=58人	割合
態度面	43人	74%
内容面	8人	14%
両方	5人	9%
その他	2人	3%

結果は、態度面に分類された回答が約7割であった。個人で考えた内容を伝える際に、他者意識をもってわかりやすく伝えようとしている生徒が態度面に比べ、少ない結果であった。

生徒の回答の一部

- ・まわりに聞こえる声で発表している。(態度面)
- ・読むのではなく周りを見ながら発表した。(態度面)
- ・自分の伝えたいことがしっかりと伝わるように意識した。(内容面)

次に「発表を聞く際にどのようなことを意識していたか」という問いに、自由記述で回答してもらった。静かに聞く等の態度面と自分の考えと比較する等の内容面、態度面と内容面の両方が書かれているものに分類をした。結果は、以下の表2の通りである。

表2 事前アンケートの結果（聞く）

	人数 総数=58人	割合
態度面	39人	67%
内容面	16人	28%
両方	3人	5%
その他	0人	0%

結果は、発表時と同様、話している人の方を向く、静かに聞く等の態度面を意識している生徒が、約7割であった。自分の考えと比較しながら

ら聞く等の内容面を意識してる生徒が態度面に比べ、少ない結果となった。

生徒の回答の一部

- ・発表する人の方を見てしっかり聞く。(態度面)
- ・手を止めて聞く。(態度面)
- ・自分の意見との違いは何かわかるように意識して聞いている。(内容面)

・黒板の方を向いて読みながら話すのではなく発表を聴いている人の目を見ることが大切だと考えた。(態度面)

次に「今回の授業を通して、どのようなことを意識しながら発表を聞くことが大切だと考えたか」という問いに、自由記述で回答をしてもらった。分類方法は事前アンケートと同じである。結果は以下の表4の通りである。

5-2. 事後アンケートの結果

まず、「今回の授業を通して、どのようなことを意識しながら発表することが大切だと考えたか」という問いに、自由記述で回答をしてもらった。分類方法は事前アンケートと同じである。結果は以下の表3の通りである。

表3 事後アンケートの結果(発表)

	人数 総数=53人	割合
態度面	10人 (-33人)	19% (-55%)
内容面	33人 (+25人)	62% (+52%)
両方	8人 (+3人)	15% (+6%)
その他	2人 (±0人)	4% (+1%)

結果は、内容面を意識する生徒が、6割以上に増加した。具体的な数値を示す、何を伝えたいか考える、聞き手のことを意識する等の意見があり、わかりやすく伝えるために、何が重要かを考えることができていた。

生徒の回答の一部

- ・幾つかのデータを用いて具体的に理由を考え、それをわかりやすく端的にまとめて口頭でも説明をするのは難しいけど聞いている側からして大切だと思いました。(内容面)
- ・しっかりわかりやすく根拠と理由をのべて誰でも理解できるような発表をすることが大切だと思った。(内容面)

表4 事後アンケートの結果(聞く)

	人数 総数=53人	割合
態度面	24人 (-14人)	47% (-20%)
内容面	24人 (+8人)	45% (+17%)
両方	4人 (+1人)	8% (+63%)
その他	0人 (±0人)	0% (±0%)

結果は態度面と内容面を意識する生徒が約半分ずつとなった。自分の考えと比較する、課題に対しての提案が実現可能か聞く等の意見があり、聞く態度について、静かに聞くことに加えて、何が必要なか考えることができていた。だが、発表する際に大切だと思うことに比べ、内容面が変化している生徒が少ない理由としては、授業内で、「聞く」と「聴く」の違いに触れ、意識的に「聴く」ことを指導したためだと考える。実際、アンケートに「聴く」という言葉が多く見られた。

生徒の回答の一部

- ・自分たちのものと比べながら他の班や人はどんな意見なのか聞く。(内容面)
- ・自分の考えや意見との違いを探したり、発表から得られる新たな考えが無いか考えたりすること。(内容面)
- ・話している人の発表を自ら聴こうとすることが大切だと考えた。(態度面)

5-3. 前後比較

個々の前後のアンケートの回答を見ていく。発表する際に意識していることについて事後で、内容面について記述があった生徒である。

生徒 A

(事前) ボソボソと小さい声で言うのではなく、はっきり言う。
(事後) 相手が理解しやすいように、難しい言葉をあまり使わない。

生徒 A は、事前では態度面に関する回答であったが、事後では内容面に関する回答となった。

生徒 B

(事前) わかりやすいように伝える。
(事後) 内容を伝え、理由や根拠を詳しく発表すること。

生徒 B は、事前から内容面に関する回答であったが、どのようにしてわかりやすく伝えるかについては記述されていない。事後では、どのようにすれば、わかりやすく伝えることができるかを記述することができた。

他の生徒の記述を見ても、難しい言葉や理解しにくい言葉を置き換える。意見に理由や根拠、具体的な数字を提示しながら説明することなどのわかりやすく伝えるために必要なことが書かれていた。このことからわかりやすく伝える力の育成につながったと考える。

次に、事後でも態度面についての記述で変化が見られなかった生徒である。

生徒 C

(事前) 聞いている人に聞こえるような声でハキハキと話す。
(事後) 早口にならないようにゆっくりと聞き取りやすいように話す。

発表を聞く際についても前後のアンケートの回答を見ていく。初めに、事後に内容面の記述が書かれていた生徒である。

生徒 D

(事前) どんな発表でも拍手をすることを意識した。
(事後) 課題に対して、現状では、その案は実現できるのか考えながら聞いた。

生徒 E

(事前) 話を聞いてないことがないように手いたずらはしない。
(事後) 自分の意見と違うところを比べて聞いていた。意見の内容が同じでも考え方が違っていたらメモを取っていた。

生徒 D・E ともに事前では態度面、事後では内容面に関する回答であった。

他の生徒の記述を見ても、現実世界と結び付けたり、考えを比較したり、発表を参考にしながら自分の考えに取れたりしながら、考えを深めることができたので、聞き手の態度を育成することができたと考える。

次に、事後でも態度面についての記述で変化が見られなかった生徒である。

生徒 F

(事前) 話している人が言っていることをしっかりと聞き、最後まで聞くようにしている。
(事後) しっかりと聞きうなずいたりすること。

生徒 F のように、前後で変化がなかった生徒が一定数いた。だが、発表をする際、発表を聞く際に態度面のみを考えている生徒が問題であるというわけではない。発表をする・発表を聞くのどちらの際でも態度面を意識することは重要だと考えている。全ての生徒が、態度面について意識できているのは小学校からの継続な指導によるものである。

6. 本研究の成果と課題

6-1. 成果

本研究の成果は3点ある。1点目に、KP法の活用が生徒の「わかりやすく伝えること」に関する意識の変容につながったことである。KP法は文字量を制限している。そのため、教科書等の内容をそのまま書き写すことができない。表現の仕方を生徒自身で変更する必要がある、表現の仕方を考える中で、伝わりやすい表現を生徒なりに見つけることができた。そして発表を聞く際に文字量が少ないため、見ることに余裕が生まれる。そこから自分との考えを比較する等の聞き手の態度も育成することができた。

2点目に、KP法の作成段階をデジタル化したことである。限られた授業時間内では、個々の指導ができない場合も多い。デジタル化し、コメントを加えることで、すべてのグループに平等の指導・支援をすることができた。紙媒体でも、生徒が作成したものを回収することでも可能である。だが、紙媒体では、並べる時間やスペースが必要となる。デジタルなら並べられてるものをすぐに画面上で確認することができる。したがって、教師は場所にとらわれなかったり、隙間時間を使用したりしながら、個別の指導・支援が可能となる。

3点目に、事前に様々な側面の資料を提示することで発表内容が偏らなかったことである。本研究では人口減少の解決策について考えた。人口減少の要因については、様々な側面があるが、資料を提示しないで、生徒だけで考えると、ブラウザの上位にでてくることのみを読み、要因が偏ってしまう可能性がある。資料を読み取りから行うことで、視野が広がり、ブラウザで検索する際に、様々なWebサイトを見ることができていた。さらに解決策についても、ブラウザで検索する生徒はいたが、そのまま書き写すことはしないで、参考にしながら考えることもできていた。

6-2. 課題と今後の展望

課題としては、2点ある。1点目に生徒個別のわかりやすく伝える力の変化を読み取ることができず、意識の変容にとどまったことである。KP法の作成をグループで行ったため、個々の生徒が文章等を書く機会がなかった。教職大学院での実習の中で主に授業観察をしていたため、授業以外の場面での生徒が書いたものを見る機会が少なかった。授業以外で変化が見られる可能性はある。そのため、単元内では、始めと終わりに文章を書かせ、比較をすることで、授業内や単元内で学びを実感できる場面を設定する必要があった。さらに授業時間外の時間でも文章を書かせる時間を多く取り、生徒自身が変化に気付いたり、教師が指摘したりするなど、日常からの指導が必要になる。

2点目に、発表が複数時間になる際に、時間割や学校行事等で期間が空いてしまうと、発表の振り返りが困難になってしまうことである。本実践では、KP法の発表は、内容が黒板に残るため、写すことよりも聞きながら考えたことをメモするように促した。即時の振り返りはしやすい反面、時間が空いた後の振り返りは難しさを感じた。補足説明を口頭で行っていたため、生徒が考えたことだけでなく、重要だと感じることもメモをさせる必要があった。振り返りの黒板に貼られたものを写真で共有をしたが、口頭で説明されたものを付箋等で提示する、授業者によって要点を整理したものを提示するなど振り返りの時間に導入を工夫し、生徒が、その後の活動が行いやすくなる導入の工夫も必要であった。

本研究では、発表をする際、聞く際に態度面から内容面に変化が見られなかった生徒もいるため、KP法を活用した継続的な指導の効果の検証や個に応じたKP法の活用方法を考えていきたい。

7. 参考・引用文献

- ・川嶋直 (2013) 『KP法 シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション』 みくに出版
- ・川嶋直・皆川雅樹 (2016) 『アクティブラーニングに導くKP法実践』 みくに出版
- ・川嶋直 (2023) 『対話を生みだすKP法』 みくに出版
- ・古屋啓一 (2022) 「KP法を用いた授業は生徒何をもたらすか」 山梨大学教育学部紀要
- ・土屋善和・千葉眞智子 (2020) 「「地域構想型ジグゾー法」と「KP法」を取り入れた授業の試み」 琉球大学教職センター紀要 第2号
- ・田畑忍 (2021) 「Power point を利用したKP法の試行とその結果」 玉川大学教師教育リサーチセンター年報 第11号
- ・文部科学省 中学校学習指導要領 (平成29年示) 社会編
- ・文部科学省 (2012) 「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力の育成に向けて～ [中学校版]」